

Medi-Way 医療通訳者紹介 Vol.13 中国語担当 守山さん

◆なぜ医療通訳者になった？

子供の頃から日本の方が身近にいたので、日本に興味を持ち日本の大学を目指すことは自然な流れでした。卒業後は通訳や翻訳の仕事に携わり、結婚や出産を経て育児が一旦落ち着くと、「これからの社会で活躍できる何かを…」と考えるようになりました。自分の言語力を生かしながら、特色のある専門的な通訳や翻訳の仕事に就けたら、もっと人や社会の役に立てるのではないかと探していた時に大阪大学の医療通訳養成コースに出会いました。その時、家族に付き添って病院へ行った時のことも頭を過り、躊躇なく医療通訳の勉強を始めました。



◆今まで医療通訳に携わってきて一番嬉しかったことは？

いつもうれしく思うことは、無事に通訳が終わり、「ありがとう」と言葉をいただく瞬間ですが、一番印象に残っていることは、数回にわたり対応した小児科のケースになります。患者（子供）のお母さんが自己判断で薬の量を変えるため、医師は厳しく指導。それに対してお母さんの不満が爆発。医師はお母さんの勝手な行動が理解出来ないなど、度々意見が合わずお互いが不満を表す言葉も漏れ…という場面がありました。お二人の間で言葉を慎重に選びながら、文化や価値観の違いにも心を配り通訳をしました。医師もお母さんも子供に早くよくなってほしいという気持ちは繋がっていましたので、最終的にお母さんが医師の話を聞き入れて薬の量をしっかり守り、我が子が回復してきたのを実感し、医師に心から感謝をしていました。私は言葉や文化の媒介者として“お二人の橋渡し役になれたなあ”と実感しました。

◆より良い通訳をするために心掛けていることは？

私は医療通訳者として中立・公平な態度を取ること、偏らずに忠実に通訳することが大切だと思っています。通訳という仕事では、基本的にどちら側に寄るということはないのですが、同行通訳では立場上難しい場合もあると耳にします。病院内の通訳者は主語が「当院」「私共」等となるために、どうしても病院側の人と感じられたり、同行通訳者は患者さんと過ごす時間が長いので患者さん側の気持ちに寄り添いがちになってしまう、ということがあるようです。遠隔通訳では、依頼と同時に通訳開始となるため、中立性・公平性が大きな強みであると思います。そして、私もいつもそのように心がけて通訳にあたっています。

今月のピックアップ



「通訳者あるある Vol.2 - 言葉は難しい！」



前回、いろいろな同音異義語をご紹介しました。「間違い」とまではいなくても、日本語と外国語のよく似た発音が元で、通訳中に「エッ？」となることも通訳者あるあるの一つです。スペイン語の通訳者は、医師の話した薬の名前（ヘルベッサ）がスペイン語の「ビール」（セルベッサ）と似ていたため「ビール飲んでますか？」と勘違いしかけたとか。暑い夏にはつつい、かも知れません。また、日本在住ブラジル人の間では、和製英語ならぬ「ポルトガル製日本語」があるそうです。日本に住んで長い方だと、母語の外国語と日本語とをうまくミックスして話されるので、通訳者にはこれもまた難題と言えます。中国語でも本来「外来・入院」は「門診・住院」と言って日本語とは異なりますが、日本語の表記をそのまま中国語読みされることがあります。「トンユエン」と話されるのでよくよく聞いてみたら「通院」でしたが、中国語に「通院」という単語はないので通訳者は四苦八苦です。他にも、英語の患者さんが「ザイルカード」とおっしゃるのを「エッ？」と聞き返してみたら「在留カード」だったという例も（笑）

言葉は生きものとも言われ、環境や時代によって変化していきます。難しいものですが面白さも無限です。言葉を扱う通訳者たちからの楽しい報告、またご期待ください。



1周年を迎えました！

昨年8月からお届けしている「Medi-Way 医療通訳だより」が、なんと！この第13号で1周年を迎えました。思えばコロナ禍の中のスタートでしたが、遠隔医療通訳を行う私たちについて何か少しでもお伝えできたら、また、普段直接お目にかかれぬ皆様と何かでつながりたい、との思いで始めたものです。1年無事に続けてこられたのは読んでくださる皆様の存在があったからこそ！いつもありがとうございます。そしてこれからもどうぞよろしく願いいたします。

